

中辺分別論における grāhyagrāhakabhāva の意味

金 俊 佑

1. 序 論

Madhyāntavibhāga-bhāṣya (『中辺分別論』、以下 MAVBh と省略する) においては grāhyagrāhakabhāva (以下 ggbh と省略する) という語句が登場する⁵⁵⁾。従来、この語句の bhāva は「体」、「もの」、「実物」等の語で訳されてきたが⁵⁶⁾、最近、「関係」と訳する傾向にある⁵⁷⁾。これに対して、北野氏は多数の論文で「関係」と訳するのは不適切であると批判した⁵⁸⁾。本稿は、北野氏の見解に賛同する立場で、MAVBh における ggbh の bhāva は「関係」ではないことを *Madhyāntavibhāga-ṭīkā* (『中辺分別論釈疏』、以下 MAVṬ と省略する) に基づいて論証する。

55) MAVBh[18, 2-3] śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā. また、ggbh は *Triṃśikā-bhāṣya* (『唯識三十論』、以下 TrBh と省略する) においても登場する。TrBh[40, 1-2] tasyeti paratantrasya pūrveṇeti parikalpitena|tasmin vikalpe grāhyagrāhakabhāvaḥ parikalpitaḥ. 本稿では MAVBh の ggbh に考察の範囲を限定する。

56) 順番通り、山口 [1935: p. 18, 14]、長尾 [2005: p. 233, 1-2]、兵藤 [2010: p. 361, 7-8] の翻訳。そのうち、山口訳は MAVBh ではなく MAVṬ で註釈のために引用する MAVBh の ggbh 箇所に対する翻訳である。また、小谷 [2017] は当該の ggbh を「所取と能取であること」と訳している。

57) 三穂野 [2003: p. 25, 21-22]、金 [2007: p. 91, 10-11; p. 93, 23-24]、那須 [2009: p. 281, 7-8]。これら三つの研究は従来の訳語とは違って「関係」という訳語を採用しているが、その理由に関しては述べていない。

58) 北野 [2014; 2015; 2016a; 2016b; 2017]。北野の研究は MAVBh のみならず、TrBh の ggbh の訳に関しても検討する。本稿では、MAVBh の ggbh に検討の範囲を限定する。

2. grāhyagrāhakabhāva の登場文脈

ggbh は *Madhyāntavibhāga* (『中辺分別頌』、以下 MAV と省略する) I .k.1 に
対する世親の註釈において登場する⁵⁹⁾。k.1は「虚妄分別」、「所取・能取」、
「空性」という三つの概念の有無について虚妄分別を中心に記述したものであ
る⁶⁰⁾。そして、k.2では同一の内容が「空」を述語として、再び記述される⁶¹⁾。
世親の註釈によれば、この k.1 と k.2 は虚妄分別の有無相を述べる箇所である⁶²⁾。
このうち、有相とは虚妄分別が存在するということであり、無相とは虚妄分別
において所取・能取の二取が存在しないということである。このように、「虚
妄分別」に有と無という二つの特性があるということ、「虚妄分別の有無相」
を論じることが MAV k.1、k.2 の主題である。

さて、ggbh は MAV k.1 に対する世親の註釈の中でも、k.1 で挙げている三つ
の概念のうち、「空性」を定義する箇所で登場する。「空性」とは「虚妄分別」
の空性である。「虚妄分別」は空であるからである。そして、「虚妄分別」が空
であるということは「虚妄分別」が「所取・能取」について空であるというこ
とである。「所取・能取」が「虚妄分別」には存在しないからである。したが
って、「空性」とは「虚妄分別」に「所取・能取」が存在しないことである。

このような空性の意味を、世親は ggbh という語句を用いて「śūnyatā tasyā-
bhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā」と表す。「虚妄分別に二取が

59) MAVBh[18, 2-3]. MAVBh において ggbh が登場するのはこの箇所だけである。

60) MAVBh[17, 16-17]

abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate |

śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate || (k.1)

虚妄分別は存在する。そこに二は存在しない。しかし、そこ（虚妄分別）に空性は存
在する。また、そこ（空性）にもそれ（虚妄分別）は存在する。(k.1)

61) MAVBh[18, 8-9]

na śūnyam nāpi cāśūnyam tasmāt sarvvaṃ vidhīyate |

satvād asatvāt satvāc ca madhyamā pratipac ca sā ||

それゆえに、一切は空ではなく、空でないのでもないと言われる。有であるから、無
であるから、また、有であるからである。そして、それが中道である。(k.2)

62) MAVBh[18, 19-20; 22, 12]

存在しない」ということが、ここでは「虚妄分別が ggbh から離れている」と言い換えられている。このように、問題の ggbh は「虚妄分別」に存在しないもの、虚妄分別の有無相の観点からみれば無相に相当するものである。これは ggbh が登場する文脈を示す。ggbh は虚妄分別という一つのものが有する二つの特性、有相と無相とを述べる際に、無相に相当するものを言及するとき登場する。

以下、虚妄分別の有無相に対する安慧の註釈において、虚妄分別の無相に関する表現を収集し、ggbh の bhāva が何を意味するのかを考察する。

3. 安慧註釈の検討

兵藤 [2010] は ggbh の bhāva が安慧の註釈で「自性 (svabhāva)」と言い換えられていることを根拠として、ggbh を「所取と能取の実物」と訳する⁶³⁾。このことより、bhāva は「自性・実体」と意味が同様であると結論づける。さらに、安慧の註釈では、所取・能取に bhāva、svarūpa、ātman が付加された表現が登場していることも指摘する⁶⁴⁾。したがって、兵藤説によれば、bhāva は「関係」ではない。

しかし、兵藤 [2010] は ggbh の翻訳の問題を主題としたものではないので、ggbh の言い換えに関して詳細に論じてはいない。そこで、本稿では兵藤 [2010] が指摘する諸箇所、虚妄分別に存在しない二取に関する表現を、一つ一つ検討しながら、ggbh に適切な訳語を考察することにする⁶⁵⁾。

① svabhāva

MAVBh の ggbh 箇所に対する MAVṬ の註釈においては bhāva を svabhāva と

63) 兵藤 [2010: p. 361, 7-8]

64) 兵藤 [2010: p. 362, 9-18; p. 392, 13-33 (脚注70)]

65) 北野 [2015: pp. 46, 3-50, 13] も兵藤説を検討して ggbh を「所取・能取関係」と訳するのは不適切であると結論付ける。北野 [2014] は兵藤 [2010] で提示された言い換えのうち、svarūpa と svabhāva を検討している。本稿は、それに加え、ātman と言い換えられる場合も検討し、各々の言い換えの意味に基づいて ggbh の適切な訳語を考察する。

言い換えている。次のようである。

MAVṬ (Y) [14, 4– 7]⁶⁶⁾

*grāhyagrāhakabhāv ena virahitatā⁶⁷⁾ viviktatā hy abhūtaparikalpasya śūnyatā / na
tv abhūtaparikalpo 'py abhāvaḥ / yathā śūnyā rajjuḥ sarpasvabhāvenātatsvabhā-
vatvāt sarvakālaṃ śūnyā na tu rajjusvabhāvena⁶⁸⁾ | tatthehāpi*

ggbh から離れていること⁶⁹⁾ とは、分離性が虚妄分別の空性である。しかし、虚妄分別も存在しないのではない。例えば、縄は蛇の自性については空である。それ（蛇の自性）を自性とするものではないから、常に空である。しかし、縄の自性については〔空では〕ない。この場合もそれと同様である。

まず、虚妄分別が ggbh から離れていることが虚妄分別の空性になるが、これが虚妄分別の無を意味するのではないと、虚妄分別には無相と有相とがあることを述べる。つづいて、虚妄分別と所取・能取とを、それぞれ、縄と蛇とに喩え、虚妄分別の有無相を説明する。

縄は蛇の自性 (svabhāva) については空であるが、縄の自性 (svabhāva) については空ではない。すなわち、縄には縄の自性 (svabhāva) は存在するが、蛇の自性 (svabhāva) は存在しない。

この譬喩からみれば、虚妄分別には虚妄分別の自性は存在するが、所取・能取の自性 (svabhāva) は存在しない。この二つの自性は各々虚妄分別の有相と無相に相応するものである。したがって、MAVBh において虚妄分別の無相として提示される ggbh が、ここでは、所取・能取の自性 (svabhāva) と言い換えられているから、このことより、ggbh の bhāva は「自性 (svabhāva)」と意

66) 以下、本稿の引用文中のイタリック体は『中辺分別論釈疏』の梵文写本の散失箇所に対する還梵文を示す。

67) MAVṬ(Y), *rahitatā*. MAVBh, MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い *virahitatā* と校訂した。

68) MAVṬ(Y), Ms, *rajjuḥ svabhāvena*. Tib, MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

69) 三穗野 [2003: p. 104, 19] は「所取と能取の関係を欠いていること」と訳する。

味を共有していることが確認される。

② ātman

MAV I. k.3からは、議論の主題が虚妄分別の自相が変わる。MAVBh では、それ (k.3) に先立ち、虚妄分別の有無相をまとめる。そして MAVṬ は、これに従い、虚妄分別の有相と無相とを要約的に註釈する。ggbh は、この際、虚妄分別の無相に対する註釈において、再び登場する。その際に、安慧も、世親と同様に、虚妄分別の有無相のうち、無相を表すために ggbh という語を用いる。次のようである。

MAVṬ (Y) [16, 5-11]

evam abhūtaparikalpasya sallakṣaṇam asallakṣaṇam ca khyāpayitveti⁷⁰⁾ sattvena lakṣyata iti sattvam eva sallakṣaṇam / abhūtaparikalpo 'stīty tenābhūtaparikalpasya⁷¹⁾ sattvam⁷²⁾ pradarśayatīty arthaḥ / evam asattvena lakṣyata iti | asattvam evāsallakṣaṇam|tat punar yad grāhyagrāhakabhāvenāsattvam | yasmād abhūtaparikalpe dvayaṃ nāsti | tasmād abhūtaparikalpo 'pi dvayātmanā nāstīty uktaṃ bhavati| |

このように虚妄分別の有相と無相を説明しおわってからとは、〔虚妄分別は〕有として特徴づけられるから有こそが有相である。虚妄分別は存在するということ、これによって虚妄分別の有が示されたという意味である。同様に、無として特徴づけられるから無こそが無相である。実に ggbh として無である⁷³⁾。虚妄分別に二〔取〕は存在しないから、虚妄分別も二〔取〕の本質 (ātman) として存在しないと説かれたことになる。

70) MAVṬ(Y). khyāpayitvetīdam. Ms, MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(O) に従い校訂した。

71) MAVṬ(Y). vidyata ity anenābhūtaparikalpasya. MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(O) に従い校訂した。

72) MAVṬ(Y). sat. MAVṬ(Bh/T), MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

73) 三穗野 [2003: p. 118, 19] は「さらにそれ（無という特相）は所取・能取関係という点でも非存在である」と訳する。

上記の引用文では、ggbh とともに、所取・能取、および、所取・能取の本質 (ātman) が虚妄分別に存在しないものとして登場する。安慧はこれら三つを一つに連結させる。すなわち、虚妄分別の無相は虚妄分別が ggbh として無であることである。そして、虚妄分別が ggbh として無であるのは虚妄分別に所取・能取が存在しないからである。それゆえに、虚妄分別は所取・能取の本質 (ātman) として存在しないのである。このように、三つの表現は互いに同一の意味として連結される。この註釈に基づけば、「ggbh として無」とは、所取・能取の本質 (ātman) として存在しない」ことである。したがって、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」に言い換えられているから、このことより、ggbh の bhāva は「本質 (ātman)」と意味を共有していることが確認される。

「本質 (ātman)」という言い換えは、MAVṬ の他の箇所においても窺われる。k.1 と同様に虚妄分別の有無相を論じる k.2 には「一切法は空ではなく空でないのでもない」という語句が登場する⁷⁴⁾。世親は一切法が空でないのは空性と虚妄分別とが存在するからであり、空でないのでもないのは二取は存在しないからであると註釈する。さらに、一切法とは有為法と無為法のことであって、有為法に当たるのが虚妄分別であり、無為法に当たるのは空性であると k.1 で登場した三つの概念と一切法を連結付ける。

安慧は、以下の註釈を通じて、一切法を構成する有為法と無為法とが、各々、空ではなく、空でないのでもないことを説明する。

MAVṬ (Y) [15, 15-21]

*sattvād abhūtaparikalpasya*⁷⁵⁾ *na saṃskṛtaṃ abhūtaparikalpātmanā śūnyam*⁷⁶⁾ /
*asattvād dvayasya*⁷⁷⁾ *grāhyagrāhakātmanā śūnyam | śūnyatāyās tu sattvam*⁷⁸⁾

74) MAVBh[18, 8-9]

75) MAVṬ(Y). *sattvād ity abhūtaparikalpasya*. MAVBh, MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

76) MAVṬ(Y), *na saṃskṛtaṃ śūnyam abhūtaparikalpātmatvena*. Tib, MAVṬ(Mi) に従い校訂した。
また、MAVṬ(O) は *na saṃskṛtaṃ śūnyam abhūtaparikalpātmanā* と校訂している。

77) MAVṬ(Y). *asattvād iti dvayasya*. MAVBh, MAVṬ(Pa), MAVṬ(Mi), MAVṬ(O) に従い校訂した。

abhūtaparikalpe taddharmateti kṛtvā śūnyatāyām apy abhūtaparikalpo dharm-
mirūpeṇa vidyate | evam asaṃskṛtam api dharmmatārūpeṇa na śūnyam |
abhāvasaṃjñakena dvayrūpeṇa śūnyam /⁷⁹⁾

虚妄分別が有であるからとは、有為法は虚妄分別の本質について空ではない〔という意味である〕。「二つが無であるから」とは、〔有為法は〕所取・能取の本質 (ātman) について、空である〔という意味である〕。〔「空性の中には虚妄分別が、虚妄分別の中には空性があるから」とは、〕しかし、空性は虚妄分別において有である。それ（虚妄分別）の法性であるからである。また、虚妄分別も空性において有法のあり方で存在する。このように無為〔法〕は法性というあり方について空ではない。無という二〔取〕のあり方については空である。

有為法を註釈する箇所において虚妄分別の有無相が論じられている。虚妄分別の有相は、虚妄分別である有為法が虚妄分別の「本質 (ātman)」については空ではないということである。そして、虚妄分別の無相は、有為法は所取・能取の「本質 (ātman)」については空であるということである。

このうち、無相として登場するものが問題の ggbh に相当するものであって、ここでは、所取・能取の「本質 (ātman)」と表現されている。これは、前の場合と同様に、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」と言い換えられるものであることを示す。したがって、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」と意味を共有していることがこの引用文からも確認できると言える⁸⁰⁾。

また、ここで用いられている「本質 (ātman)」という語は「あり方 (rūpa)」とも意味を共有する。なぜならば、無為法の非空・非不空を論じるときに、有為法の場合に用いられた「本質 (ātman)」という語が無為法の註釈

78) MAVṬ(Y), sarvam. Tib, MAVṬ(O) に従い校訂した。

79) MAVṬ(Y). *abhāvasaṃjñakena dvayena svarūpaśūnyam*. Tib (dngos po med ces bya ba gnyis kyi ngo bos stong pa'o) に従い校訂した。

80) 北野 [2015: pp. 53, 4-54,10] は、MAVṬ の当箇所ではなく、MAVṬ 第三章の一箇所 (MAVṬ(Y)[114, 20-115, 6]) を引用して、ggbh の bhāva が ātman に言い換えられていることを指摘する。

では「あり方 (rūpa)」という語で登場しているからである。このように、「本質 (ātman)」と「あり方 (rūpa)」とは同一の構造で同一の機能を行う。したがって、「本質 (ātman)」は「あり方 (rūpa)」と意味を共有する。

③ rūpa⁸¹⁾

先の検討では、ggbh の bhāva が「本質 (ātman)」の言い換えであることを確認した。それゆえに、「本質 (ātman)」は「あり方 (rūpa)」に言い換えられるものであるから、bhāva も「あり方 (rūpa)」と意味を共有すると言えるであろう。

実際に ggbh を所取・能取の「あり方 (rūpa)」と表現する箇所が MAVṬ に於いて認められる。次のようである。

MAVṬ (Y) [10, 12-17]

nanv evaṃ sūtravirodhaḥ sarvadharmāḥ śūnyā iti sūtre vacanāt | nāsti virodhaḥ |
yasmād

dvayaṃ tatra na vidyate |

abhūtaparikalpo hi grāhyagrāhaka rūparahitataḥ⁸²⁾ śūnya ucyate na tu sarvathā
svabhāvo nāsti⁸³⁾ / ato na sūtravirodhaḥ /

【問】 そうであれば（虚妄分別が存在するとすれば）、経と矛盾するのではないか。「一切法は空である」と経に説かれているからである。【答】 矛盾しない。なぜならば、

81) 兵藤 [2010: p. 392,13-15] は以下の引用文で登場する grāhyagrāhakarūparahitataḥ の rūpa を MAVṬ(Y) の校訂に従って svarūpa と還梵し、svarūpa が ggbh の bhāva の言い換えであると指摘する。しかし、この箇所に対応するチベット語は ngo bo である。MAVṬ 第一章に限って言えば、チベット語 ngo bo は rūpa に、rang gi ngo bo は svarūpa に対応する。そこで、本稿では MAVṬ(Y) の校訂に従わず、rūpa と還梵した。

82) MAVṬ(Y). grāhyagrāhakasvarūparahitataḥ. Tib に従い校訂した。

83) MAVṬ(Y). sarvathā niḥsvabhāvaḥ. Tib, MAVṬ(O) に従い校訂した。

そこに二つは存在しない

からである。虚妄分別は、実に、所取・能取のあり方から離れているから、空であると言われる。しかし、まったく自性がないのではない。それ故に、経と矛盾しない。

この箇所では「虚妄分別が存在する」という文句が「一切法空」と矛盾しないことを論じる。虚妄分別が存在するということと、一切法が空であるということは矛盾しない。虚妄分別も空であるからである。そして、虚妄分別が空であるということが虚妄分別が有であるということと矛盾するのでもない。「空」はあるものの無のみならず別のあるものの有も意味するからである⁸⁴⁾。そして、虚妄分別が空であるということは虚妄分別が二取について空であるということである。それゆえに、「虚妄分別が空である」ということは虚妄分別の有と二取の無を意味する。

このように空によって現れる虚妄分別の有と二取の無は、各々、虚妄分別の有相と無相とに相応する。安慧は有相に相応するものを虚妄分別の自性 (svabhāva) と表現し、無相に相応するものを所取・能取の「あり方 (rūpa)」と表現する。このうち、無相として挙げられる所取・能取の「あり方 (rūpa)」は MAVBh の ggbh に相応すると言える。MAVBh において ggbh は虚妄分別に存在しないものとして登場するからである。このように、ggbh の bhāva は「あり方 (rūpa)」と言い換えられている。このことより、ggbh の bhāva は「あり方 (rūpa)」と意味を共有していることが確認される。

以上、MAVBh の ggbh が虚妄分別に存在しないものを意味することに着目し、MAVṬ で登場する虚妄分別に存在しないものに関する表現を検討した。その結果、ggbh の bhāva は svabhāva、ātman、rūpa という語に言い換えられていることが確認できた。これは、bhāva の意味が svabhāva、ātman、rūpa の意

84) 「空」により現れる有と無との意味は「A に B がいないとき、A は B について空である。そして、A に余れるもの、C は存在する」という「空性の定型句」から確認される。ここで、無として否定されるのは B のみであって、A と C とは有である。

味に限定されることを示す。

そして、MAVṬにおける svabhāva 等の言い換えは虚妄分別の無相を有相と一緒に論じるときに登場していることが確認できる。すなわち、MAVṬにおいては虚妄分別の無相のみを論じるときには、虚妄分別に存在しないものがただ所取・能取と表現される⁸⁵⁾。これに反して、虚妄分別に存在する有相と無相を相互対比しながら述べる時、すなわち、今まで引用文として提示した箇所においては、所取・能取に svabhāva 等の語が付加されて表現される。この場合、虚妄分別にないものは所取・能取の svabhāva 等として提示される。同様に、虚妄分別にあるものも虚妄分別の svabhāva 等として提示される。これは、svabhāva 等の語が虚妄分別という一つの対象に存在する、あるいは、存在しない性質や状態を意味することを示す。

それゆえに、bhāva には svabhāva 等の語と同様に、性質や状態の意味もあるから、ggbh は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」と訳される方が適切であると考えられる⁸⁶⁾。

4. ggbh の bhāva は関係か

MAVṬ より収集される ggbh の言い換えに鑑みたとき、MAVBh の ggbh は「所取・能取の関係」ではない。しかし、これが唯識学派にとって「所取・能取の関係」が認められないことを意味するのではない。そして、「所取・能取の関係」が認められるということが ggbh が「所取・能取の関係」と訳されなければならないことを意味するのでもない。

まず、唯識学派にとって「所取・能取の関係」は認められる。なぜならば、

85) 虚妄分別の無相、虚妄分別に存在しないもののみを論じるときには、grāhyagrāhakarāhitatā (MAVṬ(Y)[11, 2]), grāhyagrāhakarāhitam (MAVṬ(Y)[11, 17]), grāhyagrāhakarāhitatā (MAVṬ(Y)[12, 3]), grāhyagrāhakavinirmuktaṃ (MAVṬ(Y)[13, 22]) と表現される。

86) 片岡 [2017: pp. 34, 14-35, 17] も ggbh を所取性・能取性と訳する。そして、所取は能取との関係において初めて成立するものであるから、所取性・能取性とは実質的に所取・能取の関係を意味すると述べ、所取性・能取性という語のなかには所取・能取の関係が含まれていることを指摘している。

もし、「所取・能取の関係」が認められないならば、「入無相方便」は成り立たなくなるからである。「入無相方便」とは所取・能取の無に入るための方便である。これは次のように四つの段階で構成される。

①一切が唯識であると知る。②そして、一切はただ識が顕現したものにすぎないから、認識の対象になる客観的存在、所取は無であると知る。③そして、認識の対象になる客観的存在、所取が無であるから、ただ識のみであって所取は存在しないと認識する主観的存在、能取もまた無であると知る。④所取と能取とがともに無であると知ることに入る。

このうち、③の段階において、能取の否定がなされているが、そのとき、根拠になるのが所取が存在しないとき、能取は存在しないという相互依存関係である。それゆえに、唯識学派にとって「所取・能取の関係」が認められないとは言えない。所取・能取の関係は、所取・能取を否定する過程において、用いられているからである。

また、所取・能取の関係を認めることが両者を識の顕現として理解する唯識の教義と矛盾するのではない。所取・能取の関係による能取の否定は、所取の否定を前提とし、所取の否定は一切が識の顕現であるということを前提とするからである。

そして、所取と能取との間に成立する相互依存関係は二取の無を論証するときに限って用いられる。存在するように見えるが実際には存在しない二取の存在を説明するときには、両者間の相互依存関係ではなく虚妄分別の構想機能や識の顕現が用いられる。すなわち、二取の関係は、あくまでも、二取の無を容易に納得させる目的に限って用いられるのである⁸⁷⁾。それゆえに、所取・能取

87) MAVT(Y)[27, 2-6]

kim arthaṃ punaḥ prathamata eva vijñaptimātrasyaivābhāvaṃ na vibhāvayati | grāhyapratibaddhatvād dhi grāhakasyopalabhyārthābhāve sukhaṃ praveśaḥ syād ālambanasvabhāvavināśāt / anyathā vastuno 'pavādam eva kuryāt grāhyagrāhakayoḥ parasparanirapekṣatvāt |

ところで、何のために、最初から唯識であるという〔認識〕が存在しないと設定しないのであるか。能取は所取に縛られているものだから、認識される対象が存在しないとき、所縁を自性とするものは滅するから、容易に、〔所取・能取の無に〕悟入するであろう。しかし、そうでなければ、事物を損滅することだけになるであろう。所取

の関係を認めることが所取・能取の存在を認めることに、あるいは、識の顕現を否定することにはならない。したがって、唯識学派においても「所取・能取の関係」は認められる。

しかし、「所取・能取の関係」が認められるとあって MAVBh の ggbh が「関係」と訳されなければならないのではない。文脈に合わないからである。ggbh が登場する「虚妄分別の有無相」の箇所は「虚妄分別」を「二取」と「空性」との関係で扱う。もし、「所取・能取の関係」と訳すれば、「虚妄分別」が「二取」との関係ではなく、「二取の関係」との関係で記述されるようになる。しかし、「虚妄分別」を「二取の関係」と関連して記述することはできない。「二取の関係」は所取・能取の二つの間で成立する関係だからである。

虚妄分別に「二取の関係」がないという文章自体が間違ってるのではない。虚妄分別は二取ではないから、二取の間で成立する関係が虚妄分別にあるわけがないからである。しかし、このような記述は、二取を虚妄分別によって分別された虚妄なるもの、識の顕現にすぎないものと把握して、その存在性を否定する MAVBh の全体的な文脈において、いかなる意味も有しない⁸⁸⁾。したがって、「所取・能取の関係」が認められるということが ggbh の bhāva が「関係」と訳されなければならないことを意味するのではない⁸⁹⁾。

5. 小 結

以上の考察をまとめれば、MAVBh で登場する ggbh は「所取・能取の関係」ではなく「所取・能取性」である。ggbh の bhāva が、MAVṬ で svabhāva、ātman、rūpa と言い換えられているからである。しかし、これが唯識学派が

と能取との相互依存がなくなるからである。

88) 北野 [2015: p. 45, 10-15] は、ggbh の bhāva が「関係」であれば、「空性の定型句」が、「或る場所に、或る関係がない」ということになり、世親がこのようなことを言わんとしているのであるかと、「関係」と訳することに疑問を表している。

89) もし、世親が ggbh をもって所取・能取の関係を表そうとしたとすれば、ggbh にもっとも相応しい文脈は「入無相方便」を説くときであろう。しかし、「入無相方便」を説く MAVBh、MAVṬ の箇所において、ggbh という語は認められない。

「所取・能取の関係」を認めないことを意味するのではない。また、「所取・能取の関係」が認められるということが、ggbh の bhāva が「所取・能取の関係」と訳されなければならないことを意味するのでもない。「関係」という訳語は MAVṬ から収集される言い換えと MAVBh の文脈に鑑みて適切ではない。そこで、ggbh は「所取・能取性」と訳される方がより適切であると考えられる。

略号

- MAV : *Madhyāntavibhāga-kārikā*. See MAVBh
- MAVBh : *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (Vasubandhu), ed. by Gadjin Nagao, *Madhyāntavibhāga-bhāṣya : a Buddhist philosophical treatise*, 鈴木学術財団, 1964.
- MAVṬ(Bh/T) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by V. Bhattacharya & G. Tucci, *Madhyāntavibhāgasūtrabhaṣyāṭīkā of Sthiramati*, Luzac & London, 1932.
- MAVṬ(Mi) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by 三穂野英彦, 『Madhyantavibhaga 第一章 相品における理論と実践』(広島大学博士論文), 2003.
- MAVṬ(O) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by 小谷信千代, 『虚妄分別とは何か：唯識説における言葉と世界』第3部校訂テキスト, 法藏館, 2017.
- MAVṬ(Pa) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by R. Pandeya, *Madhyānta-vubhāga-śāstra, Containing the Kārikās of Maitreya, Bhāṣya of Vasubandhu and Ṭīkā by Sthiramati*, Delhi, 1971.
- MAVṬ(Y) : *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (Sthiramati) ed. by Susumu Yamaguchi, *Madhyāntavibhāgaṭīkā: exposition systématique du Yogācāravijñaptivāda*, 破塵閣, 1934 ; repr. 鈴木学術財団, 1966.
- TrBh : *Triṃśikā-bhāṣya* (Sthiramati), ed. by Sylvain Lévi, *Vijñāptimātrāsiddhi, Deux Traités de Vasubandhu, Viṃśatikā (la Vingtaine) accompagnée d'une Explication en Prose et Triṃśikā (la Trentaine) avec la commentaire de Sthiramati*, ed. by S. Lévi, Paris, 1925.

参考文献

小谷信千代

[2017] 『虚妄分別とは何か：唯識説における言葉と世界』, 法藏館.

片岡 啓

[2017] 「パラフレーズによる abhūtaparikalpa の構造分析」, 『インド論理学研究』10, pp. 25-41.

北野新太郎

[2014] 「初期唯識文献における grāhya-grāhaka-bhāva の適切な訳語についての一考察」,

『印度学仏教学研究』, 63-1, pp. 141-146.

[2015] 「初期唯識文献と認識論・論理学における grāhya-grāhaka-bhāva という語の意味の違いについて」, 『仏教大学仏教学会紀要』, 20, pp. 39-66.

[2016a] 「『唯識三十頌』第21偈 cd 句の安慧釈の竹村訳は本当に「誤訳」なのか?」, 『印度学仏教学研究』, 64-2, pp. 151-156.

[2016b] 「初期唯識文献における grāhya-grāhaka-bhāva の問題点」, 『仏教大学仏教学会紀要』, 21, pp. 341-75.

[2017] 「初期唯識思想における「外のアートマン」についての一考察」, 『印度学仏教学研究』, 65-2, pp. 168-173.

金才 權

[2007] 『『中辺分別論』における三性説の研究——三性説の形成とその思想史的展開を中心として』(龍谷大学博士論文)

長尾雅人・梶山雄一・荒牧典俊訳

[2005] 『大乘仏典15: 世親論集』, 中央公論社.

那須円照

[2009] 『アビダルマ仏教の研究: 時間・空間・涅槃』, 永田文昌堂.

兵藤一夫

[2010] 『初期唯識思想の研究: 唯識無境と三性説』, 文栄堂.

三穂野英彦

[2003] 『Madhyantavibhaga 第一章相品における理論と実践』(広島大学博士論文)

山口益

[1935] 『中邊分別論釋疏: 安慧阿遮梨耶造』, 破塵閣書房, repr. 鈴木学術財団, 1966.